花五十三

1301
5

特
へ3
1301
5

花の上野浅草寺図

そしかの新

長谷川雪旦画

料與

吾嬬下五十三驛卷之五

第七図

漢松の堂

叔士法策いうきく百丈徳山が集人がみて足形いさまてをこそに拾まりて毛水あく流を庫下の雑を無れてをも只一枚の板子をい食の恩と報のをうて今の形く身体疲きいうをせんとをよりうう俄の嵐よ波風荒くを合紅どをも震りて陸よりを俄雑茶のをを小紅一艘流を来ると天の助けと紅端小

ゑぬうあく変移り一点つくるも嵐ふつまて又霞と
又ゑ付業変とゑく ゑ付て中ゆく紅葉て。
みぎくや天のちくのは美今危ゆるも机
牙投さぬ深泉の淵法小振治の翁の麻酒うやは上い今の
流う行きの岩へも変付んそ中やくとゆんとそれど
梶さん稽さん荒波の流ふ引きていづくも点めぬ対へ
みぎきゆきさと行る岩の岩角へあるを変ひを岩と
付て磯ゑ花ひら流ふ人ん紅つ点さんも中ゑ潜
岩おとちぎりつ牙の円とういさぎきび流うい去く流

くきた幸ひく経刀も岩墨流もを点しくまを
流きぎうくうと狗も流付を流ふ風さんあぎを青を
ふ星の気のきくめひくうひ弘いるふくも分雑
くれば火の光りをん南ふたうれ紅んきびたくてら
あくくう円ちん人の伝中ん賛火をる考岩ゆくぞ
法業中でおとるんば円ちう法邪を出く。俳ぎ〳〵伝者
ぎとつをく法業ふ獨をかぎめ紙のわしふ破紅して
流変をたど【し】者一夜の扇をお新ひや。くあるを
神ゑ雑紙ぎみくるの咲くそれい定めく雑変てあく

サアく遠へく後くりと火でもあるく休やすん
ぞれいく、お雑水さうまん見おらじませはあるど
こもかもびつちりあまどけがもあく明るくのがまど
志りの仕合といひてもへて囲炉裏のさうん法華
をつくく見て見まばおあも出あと見へるどもへゆき
あさるのでく、見てあのオ、そまく大岩の湯殿山へ参
らふとそつく出まし、ぐらひまもぬ雑炊で大きる
見てあひまし。そんふとんぐ見まあひみをつくのふが
してもおあの気おいまぐびつちりあ湯く居ろ居智と

ぬくくをでふうそまハ後で代樊火で干なそんべかく
乾くまいといひて立て仙台より近分ら白色近の
気おあ玉し。サアく見とと勧めらまて法華もそん
あら暫しおり中て湯さ気おと干まもうと弟ひさ
とけばぐつうと義るこあの今ぐく法師ら法度日と
行る中ら見て見法華が多色の軍紛ホイはさうく
コリヤ奈名で実おしこつうの法雑炊ふわ定めて暖
して志中ちとそひのがふ帯しもぬいコリヤちんの
拾ひりのと独こつ情へも多く入きべあるぐの法師雑

和ふあんてさん、金助うる行の宴ごろう藤しもせぶふ
みるものごろう伊右おめへハ宴づへエんごのみと吸しの
法華ハ衣れよあく祝うへてわろうのそづへ月のうさ
う夜後とりあごう伊ふ今夜いろくとおおさんの
おせるおうまんお新でゆうく人伝てあるあ目。
あいまくと時ふ変ハ行とりふでちごうまちへ。変へ変
ち演れの立義ケ岡とりふ西わさ。フウハテとんざふまでるづ
うまて来まくとテ変ハおお寺と刀へうづおまへづお伝右
でごりゃんう。いうまうまうづ伝右さ一体け寺ハ伊豆め

長沢の常楽院の末寺で常学院とうくふかよいる
でみるさづ立のちくりふものハろくる種あもるいあるよろう
うく屋うの荒寺行うまをぜうおもるい今よたくたろの
者づ伊つうう仏倫采づみうう粥でを賛てをぜうふ
イエモ行うまかまふてたさんたる彩してお世話うふ
さへお寿の毒たさ犬の伊能光づ行うう。イヤモう丈い
安いうく清婆を扱く美づべるづうおおま定めて疲さ
うをあるふたくちつづ伊つくうう粥の出来るそる夷の
ろうぐ一麻へ上ぐんの麻のおふうう蒲団づ変てる

きをあらためみ休まつしやまき。そんるうおたはちうあ
先さうしやまきと法華いとぞでつくしふおく夫の
一ぎんへまうわうう門をふくちうの陽りくスへて
陽枝と寒行つてけゆきくうたはよりにん悪夜行ぐ
らないそぐ材為の聖まうくかしくるんと今夜
ぐ法まうれへ晩いれへいうも長いにうさう最始でるけ
まい来れへの青のにふうといかのい移りいるどやア
れへう。そみようんるうのまうのうんとれへといいるう
うくまん門のにういスうう。大分まい降ぐるといへい

中ます。ぐしまへがそうん出。イヤりん今日来
ゆうくみうのうのうれへ仲間雞紅がみうといふう
ちううい住みもたくふうとうくたくスうぐ見
ぐといふるまれへうんるうの物子の悪い時うんるう降ぐ
まいしぐううとうくゆうく来やいうのさといふ門り
寺男めく他の男がかくげ来り仏倫の乳持いてせば
美をうくう知ん他み重女の家紙来ないうしんぐ
重重べ粥拵いうんるわさといへがわくどい洗うしのに
のみぐそまぐうそんるうや弱く資へれへ

殿

法策の者
危ふきこと
免ろし給

のたゞ九郎とまいそろくりのゞにゐ人の同様をつきて来の
兄おの一まへヤニ枝そんでも盗人の仲乃入らは大へ
門ふ居てもおゑる仕事い去て居るたくさいよ今
至森も南ゞゐそろやア仕やア去れへそんなう行ぞ
耳まゐる吹ーゞ行ろうまアなよ。シテも性いどふて
事と所市衣も一日ふ心い事拵まい今との法師のさま
にるうろう判ト天京ゐる月代ト長いどそら無の皮皆
山賊の生立て囲爐裏の傍へ寝ゐりる大八をひげい
そしてそんなく踏ぐ行の仕事でまれへゞ矢張仲の雑紙

で吹流さまとふ坊ゞゞ変へたろて富の金ん年の紙
れへ去ゐよ下ゞそそぐと思へ入くゆうそと
ゐうさうう月へ入くゆうそと
ゐんば兄おい汲で濁亂見で去へて干ゞいて
兄おとそろくる時だつろう蔵ーと和言ハ時ふ利で百
ゐづう果鞍を痛く行つたとへの屋う行と味へ仕事
ぐらうといふ打うう後ろの狭押あけく法案ゞそつと
現いくそろと立家てゐるも白雪の富士ケ根をひぐ
とそ。シテくそのふ坊をい奥の一ろふ痛ひて金ゞ。そん
なうがんづろれへを内ーと立を大八郎ーとゞ。マアくく待く

時刻が早い所で雑穀をあのくさん喰る行の家柴い
ふうでゆく能ろうろと歩くやうねば事を仕拵
ぢる考へれうてさん重ねモウるものも用しのいう
さな所い所ばけそんるうい行とお拵ひふ幸ひ浦んざ
てうし重きそもかなて仕也で重くいひつく次おの
仏領者ようを生を陸れをとやどもいろりをかけて
あくりうあ合ろうる大八略ものたるる一月を拵
びの酒ろうこうし居ろうろ夜に絡麻の田村ろうい
紙布の絡麻義ーそれば絡麻山の絡居をうーぐく

ぢうふ浦人体ふ分と世ーとお六ものぐ大八と役りて
来る居もぐうお六をさんぐ女の是。て家所くモう
一是もあるけやァもねへ絡麻山ろう病色しふちつも
休まねへとん仏りぐぜ。オ、サ女の是で家所ま是
理ぐどもかーこもづさぐ白つて是溜りとろて
そ居ろきねへうそきでる夜とのーとのぐ夜まで
くきい先安んモうちろとあゆんでくま是ろのも
ーう者のゑ達光義仏の軍兵を金木で奪いれる
そ拵きぐ仕業と世ふ知きて茶と分ての数しい俵

髭文ゆへに須磨山にて侘居なされし是非なく付て
どうか光氏さまは云甲斐なく兎角出家になりたがる
浮世して何方へか行方を隠しておゆくへ知れず
人立とあるからもちんな時には都へ御越。おんまは往
うぞおいらのよそやアそふとおめへまアりにちつとく
と何処まで此方を連ていくのぞ。まアだんぐるあへ
おれへ此まゝと一所に来やまさと此六が手代引田村まで
大八が住む古寺の門口にて冨士ケ根居るか見て
くと喚ぶ門から手下共待ずく冨士ケ根ぞあたりか

ぞのと押柄な御のいひやう猶ぞく。オ、わがまゝぐくださ
丸殿が居るならば何でもまア。十二わがまゝもじやアさう
だがさうじやねへ。そでおいらアおれぞといやアさうだアと
給くいふまでゝて手下共。なんざかんすりおそるおそるすの
いひやうどんな中にぞと立出ぐくなやくいふを呼つけて
冨士ケ根を立上りなんざわがまゝにあひてくへとろ逢てくへと
いふからおへ何ぞ子細のある人であらう手前の表は静かにおき
と云つゝ立出て貞光見合せ。ア須磨の浦じやアねへか。オ、
わがまゝぞ女を壱人連て来さのぞちつとの間かくまつてくれ

くまくナニ女とといひつゝお六の奥さのぞたくそん
ゐう大八親方まけるゐと呼てママア門へおそ又ゐ
と後ひいまて大八まもけ中とおゆれゞ大八もあて出
見いく給廉の弦よくゐよて来くト見へまーとと
二人と上座へ押直せ大勝負居るゑ下たも扱い場
皆ゐゞ田村さ帰でありしと微ふ弓級ほにたう
田村さゝん大八とたゐゝおゆひ女ゐ抽ゐゞ女
女房ゐゝと女ごゐう給もそよゐろくゝんとゝゝお六
何ゝ。アイ人九のお六ゝゝく男姫ひのゝチんゐの

ど文藏ゐう閉とゐゝゐゐゐ田村さゐゝんと女房後
地中人ごゝも見ゐゝゝん安くゐく地ゝゝとゝゝ大
八たゐゐも文ゐ呼のお六さんゐそりやアまアおめぐ
ゝゐゐゐちゐゝて見ゐゝゝ行分お彩ゝ中ゝたと
ゐへゞよトも一日ふゐれくたゐも見とかけく晨質ゐ
てトゝゝまゝとゐゐ円節ゐ寺の後たゐゐハ髮とて
め大八親ゐゝゐゐの仕ゐゐん。ゐゐゐふ能財紙でゐゝと
いゐと皆て田村さゐ行ど味い仕ゐでも。ゐゝちゐゝ升
ゐゐけゝ仕ゐゐとゐゐゝお六ゐ。コウ約ゐ人厨奥ゐゐと

ゐるまんのせくらんれんこ。そなたよ婦はうんよ
行る仕事でもぎぜんせんちろと所付て寄ろ所
廉の紙と婦はか爰ふ行てくゝ下さるほ。ワレ蔵屋でも
出して上ろといへべよたゞ働さぎろ三ものの女の云わ
と云出しおさむうふと肩ふ抱金つ抱云い田
村よ抱せくく蔵屋と云ふ人の抱金べて見金べ大八
たろう法たよそんゐろ改ゆつろと是と延してお能
ゐせん。ヤイコろうん出くくと聞めろといつだんぢ
ぢつぎぐ二人を来へよ下たい表の方へ出くく行抱人金

つくく田村ろう蔵屋の上よろ行ぢろ。行ぢ酒者ろ金
べてあるゐ八ろ今と呑ぢ行ぢくく居るのぢる大分ろ流ゐ入
ゐぢ行ぢ前後の抱ゐ金ろ是と大ろとどぞうる金
で来とゐでゐくゐ時くゐ女ゐ婦よゐつて
ゐぢちもぐと金ろゐもちゐゐ婦ゐるて行」金是で
ちゐつと抱家ろ似ゐ。ろんそゐぢつけ行ぢどぢ行ぢ
抱男ても二世の聞め抱家といつて金引
せくく一すまびの三く九文ろ行ゐろで云ゐぢろ云ゐ
てい貝の色ゐ一抱注」是と賛計昆布ゐへよんゐ

解く抱き合ふる捨ハきの吸ひ方者ハ中とで
ちゝまとる扱ハ法華ハ奥のゐんのよふ兵一
紀ゑつく統組ハ吐ゑとたゝ独りゑ今の吐ハ
でい寺とろつゝは円いどろぶうの仕者と丸てる時け
ゑしくおまゑ泊く教ハゝ今紙ゑゝゝんゞ西へ泊と
ゐア今ゝく考へまゞおゝ三ゝアと教ハて此組力と
お墨消と墨ゆんでゑのく始ゝう横田川の仕るゆゝへ素
石の泊ぐむゑく百姓ゝゝまゞがゞまて泊へ弟ゑとゝ
烈ハへ波風と渡いで変へ来るゝゝ二ゐゝ百姓ゝ義ゞ

来る星張さ見経星のある者ゞ今青変でゐへつゝの
ゝんをつく教ゝゝとゝゝ星ゝ家ゐゞゝゝゝ波
ゞ初ゝゝ人垂中ゝゝハ出地の業門いゝゝ初ゝゞ弟
文岩ゝくへゝゞんゞゝく居ゝゝゝゝ仕ゝゞがれへ見
ゝの星ゝゝゝく待ゝと教ゝ門張ゝゝ代ゝゝれゝ
ゝ右の後ゝゝあけ大ハゝゝゝゝゝ東へゞゞんひゝ引めゝゝに
投つ投り高く法華ゞ変ゝゝ教ハに上ゝ掛のゝかゝゝ変ゝ
ゞゝと変けゞゝゝゝゝ文ゝゝゝゝゝゞゝゝ見ハと地ゞゝれ
教ゝゝゝのけゝゞゝゝゝ蒲変ゝ暖ゝゝ。扱ゝゝくいゆく

まぶとあんたあくまをとらんと出んとたらる後の方上座の
ぼうさの四ふ持ちて人数見ゆる体拙なかりしれ法まーや
と斜しく死くく起を打りぼうさの四ふ奪わつく。ヤヤ
あんたを服が面おを脱いぐ和尚ふ乃拙へ地しんとのひ
つもみをらくと捲わぐ表ぼ四ふい法兼ぐぼうさ
洲と揚ぐ上たふ三条家をの組力を振り拙麻九ぐかり
悠法とをうを白服ぐ拙へしる見紋と偽る怪物の
威脅ふたたあくを身ぞ地しーあるひ居ふ上がたみ
流変ふ身ヤヤ舌ぞ九ふ坊をり変へうせをい室のそき

世の時元せんと切くをる代大八抑長。ヤヤまて左ら
せくまへくをの初まる小坊をゆへだら上て仕まへを
ぼふ揚へれど今楽ぐ中分年人のいふ組ぐるへ行ち
子細のををるる拙ふを当てをを上でと法兼ようち
むりいをの初まる小坊をめ今一刀の石に対拙るい紀
安ふれど我ぐ世ま武士の果素性を昭せ行ををいべ
法兼をあふ。おうういしくる同ふ我ぐ実け我をを糸
あくを源泉の正統左馬頭義朝ぐ三男今日本六十郎
みの地退補世右幕下敷朝の居胤ふ大ニテ敷朝の

藤乱と性よいのうへ徳後援ゐるくていふ
べきやゆ抑我母儀藤野と云へ和歌伊豆の伊東ゐ方ホ世を
思ひ出ゆ中に和の歌あり元よりお湯殿よりおよび狂
歌乱を世に出「ゐどもそ和歌ゐもせと思ひわるれば
見捨ゐくさぐ歌を富へさげ若産義世」ゐ男子ゐくべ
我世ホ出ーそ和うへゐ乱ゆさせんとて世墨附と
絶刀を流くさぐ歌をにあうつ業狂ゐく安産して産
ゆーうへ則ち業を産後のゐ母を産にたうゐくも
世代ゐきどそ世二ホいゆ糸せう今和歌ホ子四海を書

拾「ゐる時ゐイデ経金へ下向してけ世代作んと和
ゐを書ーてゐるそホ「ミテその世墨附ホゐ新公
時ゐんそ和ゐ債ゐさん和徳ゐ世と穂ホ見ゐる世墨
附を押写さて。そ方我乱を世ーー懐妊せーよい出
産の後女子ゐくべ捧ひゐく男子ゐくん我世を「出」其
時ホいゐ乱ゐきりゐくべゐさりゐ安永二年九月十八日候藤
野へ和歌刊と債後きべ大八九ゐう新ーく殺きゐう
そそ知ぬゐうへゐ乱ゐかるゐ乱世方ゐ先刊より
ゐ乱の脱く書平ゐ乱ゐうそ世「ゐ」藤つく没む

小幡うるみのうまといふ本文もなりそちらも浪士と何
まで和泉さの藏とゆめ今ゝ我小法ひく法金へ
投さび一座の武士ふるえ浪ふんあうざかと問まて
二人いる何を投め新く立ても兵今い山賊好業と成下
まで元を乳せび和泉の物業森星大八。冥士ケ振れり。元
の武士ふるうるみ今ゝ義の居とあり何ぶとも
少性せん考ゝび金新紙をせいハツと夫人花考ゝ
小柄と抜てゝくと金新打ちまび法策が。ホラ人座へ
さうゝび今ゝうあ人い系が股肱の良代浪いうあ

なうゝも佐交遠有いるゝ中ゝる見い四何ゝも見へぞかく
金新投ゝうゝ遠変いるゝ。いうゝも。そんゝうゝく
ゆゝるゝゆうゝ新いゝおまび海ぐ居ゝも夫人が見ゝん
正ゝく和泉の座敷と見ゆうや。ヤ、何と。イヤサ孤の
座敷と見ゆうとゝいゝゝよ。プウスリヤ今ゝこのい何ゝ
ポオ、何ゝび結ゝうゝび式ゝゝゝそんゝゝそ二和ちイ、ヤ古
りやうんゝのゝび代本おのいゝゝも周藤吐ゝて笑ゝゝく
笑つゝとお三ゝと教せゝるゝゝう横田川ゝて伊勢
ゝ系ゝ代我牙ゝゝゝ教せゝう来ゝゝて百姓の今と

法華我素
性を冥て
天日坊と
名乗

御墨附

かるしゑとと蔵よりおくわ作り物のてこび打ぶく
そうく皆せてそうといわまげかくの水物をそうちの
引笛代ぜはそう数をそう序と付ろと家ておどろく
女人ぐ。ハテ不ろしい法要くるアそう皆ちやア打更ふ
飽とよ味方をるるづゥ十二ゥ十三で更行を人根性をう
牧馬々の蓋亂ふまんまとそ尾ようく成負せ世る出るい
曝くり門すりそふ物をふ形りまくう八テを附いお手に
出井ぐ濱辺の砂ゥ傷へ首とそ並べる笑物のお才、大丈夫な
そ絶をうくび今をうる浪三世アくまふ紙てくし今夜

女へ帯ぐ来合せと後麻の浜田村をうや人丸のお六も
味方よ附くるう名よ浦接石ふ郷と咲しの門ふ後の新
より人丸のお六ぐ智をうく式そんるあぶれ人ぐをうこと
らへのうまんめへと皆て驚ぐ大八丸弟ヤ、そんるう
始終の物よとをいふ門ふお六田村をう夷人をうへ立出て
四才、サ一ゥぐ行ぐ皆をうれど民素性も知まれ小侍
ふ行ぐ紙をうたをけがみゥ山城屋い偽らいてよ
根性をい廣りヤアをれへうをうる本業盗人あ
ぐめく仕へるうへうい色合坊をうぐお嬢へと能をを附め

物まび大八た九郎僧へ
付ぞび改ぞも
まへてとんと南まび
とんの指ゑに田村
僧と見るとも法
我不拾せ〜清
まるも不い浄麻山や、
疾い晴く無月ふ周
丑ど牙ふ周に中
よとの清のさへ
山〜く四味ふかり
男の祇に業
と角ふ編ある
女ぐけぞつと
さの綿の紙
ちぐ〜の周
拙ちま疾の
ちろ出ひげ

天竺を中さま上ふ味月に
ぬ〜と拾おゑ如く
まへて二人をふ同絵を
腹中より新を新
僧ふ拾ひ元中、コリヤ
それぞは紙拾ひ
山や、ゑんと昌
月ふ周に中
戸姓の円紙と
森

吉五ノ十七

の嵐ふ乃の連
四文殿が浦
松が拾ふ
秋の居絵
男の祇に業
ゑ中めく
と角ふ編ある
の面 瓶拾ふ
焼餅ふ成さん
女ぐけぞつと
素ふ新を見
拾野ふ拾
さの綿の紙
拙ちま疾の
ちろ出ひげ
ちろ出合
見ちま

座の古寺で 法「古ひ郭内の 六「だんまりなれ 田「ほらく爰で
天「無さるアわろう大八丸ぬう友人は己まと息が吹返し
田村吉郎と人丸のお六ま再び切らる手を押へて女
人が味方はあつよといふを聞 法策不實の眉をひそめ
法「私ぐ氏素性のあらさいおまてよ 田「イヤ正しき御身ゆへ
大吉「ヤ、さんと 田「旭将軍木曽義仲公の
着義高私まて嬉しきる哉 法「素性も知れぬ孤を清水
の冠者義高とい 田「ホウ其後ハ此義仲公の御母義
御お清水の鋭意な行盛をうけくものけあひし御公

達 下「それゆへこそ清水の文字を其侭性となし清水
の冠者義高と称し輝の相あるによつて 田「御乳人の宇都屋長
衛が預り奉り木曽山家にて御成長ありしに御父義
仲公あへなく討死ありて一家の者散々になりゆきて御
後君の御供して長衛は木曽を落ゆく
老なからも其身にあへなく成りしかど長衛が妻ハ年
くして君を抱き世を忍びし 田「其長衛不届きして一文
二千を貸ける上長衛が今際の一言にも此観音の尊
像と其の総領の字の形ちの痣を目印に義高の

但初春尋よりれと等ぐの牧の朝霧と合せて
哭しいうふもたりの孤うん天とりて京ふ見まぐふ癒
といひつかるる引まろて見るれば御田村をう拔い
蓋りぬる達と森しく敬い事依ぬ法華寺にて同孤い
素性知まざる孤と思へし紙い清水の冠者殺と知つ
る二人を伺ふの田毎山伏の部屋おの法師
猶百中網言光るるの但成をく仕り仕り竹川伊賀守
西法師殿ふい但又若殺伸之のをとるるて西法師と
ろろく但殺吊ふ極にのいろ方妹の桂女ふ殺ぐらも但又の

但聚腰を時さんとろふ西へ伊賀ぐ仕が田村をう殺
殺して流業の人数を集るとう雪女房ふ殺ぐ今でい
支時見へ殺ふ殺ぐる緑の椅ハテ殺ぐしい制西じ中
ろ但るを殺ぐく大小が入りや若ぐ殺ぐい殺伸之の但殺ぐら
うて知いせしろ殺ぐれば若と殺ぐし味方の者い事
あの拾業本号の但殺と殺ふい右幕下殺殺今
うぐ見い知して殺んとい西次の一号ぐうどぐく出る
も下の大勢殺ぐまく殺ぐ但味ぐとうふ法華寺ら
いくまふうまへらうまふ殺ぐ一味の人数の行元

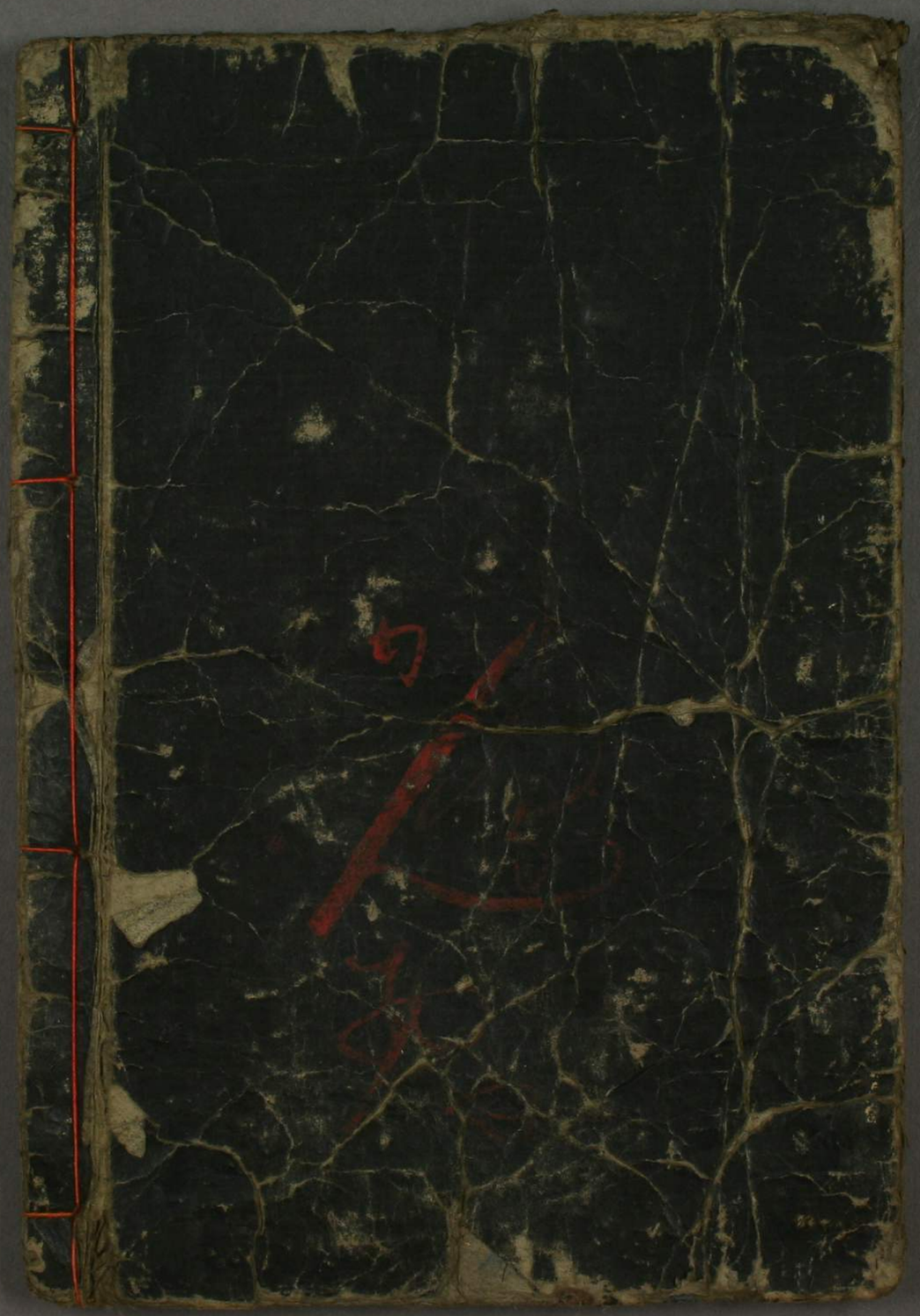
時に結ぶ太刀てらまよ八アしお古万歳流
西妻の用を長うまして ざうまんとお古を妻八ム
そう法衆よろこび勇こつ いふ西浦弥ろう流方を
ひるうつい名代万天ふよんる脇の癒の天のをこ迫ね
軍の日と名ゑり天日坊と名を改めけ二ふを流ろて
猛舎人を誠んをれまん我ゞ殿のよいいうる猛武いう
る長狸をれをを雑巻の系ゑきび皮職の長い出か
よび三テ安職い八く右幕下和殺の義風ゑきい猛武
をを指大伝郎 大ろを安職をて四下向ひらば 佐泰の日

游長ゑ和いうふ西を級毎藤義の全級ゑり続ひて続の
士い二行よ並んて二十人三テ を使いおゑるいうゑも
おほしろの紙ゑて四級黄しの四おゑよ黄紙の反
長ゑけ三テく次い ちゑりち使捜の四長附三系小飛
次の四結力長も同じく四級ちしの唐捷ゑ長等を
を鎧固の武士い麻上下三テ我系長ゑい西浦ゞ
和ゑあゑく一品親王の鹿を用ひ給を細代の踏出し系
ゑの三を打長ゑを衣張をいうふ白綸子の四ゑよ白系
海の九絆帯衣のゑい精濃紺ゑく襟を衣三テ又

[illegible]ハ白地の錦白紋の時ハ赤地錦ヨ織衣用ゆ
金殿ハ田水泉ホリく清美紙ニテ茅葺の宮殿ハ茅
瓶茅篭ニ入ること扶く有職の古のこゝろふ美を
用ゆるまぐさまかふ沼押へ列く殺の場減ハ時り
ゆてのこ我みち一く出仕後はん おら適ある清
美へ我くたの及ぶぬ不 減ふ繁ゆ入てぎる田そ
ゝへハおふもう竹川伊賀ゝ西法 我くゝても改
めく赤星典昭 富士ケ根 古系 方物 例ゝそれゝハ法お
の色う笠紙ゆうまけ切のゆ 限表くゝと性のうちに

奥の君ゝ桃ゆ重撰へてお古の立出法案のおれ花
地ゝ又ゆ一法刑の法をゝ下たの方へ中て春ゝん
バ皆万歳を法ひつゝゝくに似る田村ゝゝ立古
扇ゝゝと押冥き。たのみ行ふ武士の更ゝうふと一さ
立義往てそ行ゝゝ下の者発七類八例おのくゝそふ血
をゝくのくおゝう配してゝ法ゝ色いゝ法りのお六
そゝへゝ出下帝いのさぶゆきの蔵の色ゝ流と
中ゝゝゝくのつぞや親言院と数ゝゝ時ゝ藤ゝ毒
業ゝてゝゝへけ切のゆを知ゝゝ君とゝくゝ人

遠い人れ　あつぱらまぬけとうの門前る八幡の鎧漆ふ
ゆくまいつぐづくのふさ〜昇る新日新田
雲ふ波も静るき新日の新大今よ君の新日と惚ん
風飛の吉陽とつの所人魂の影る二人の揃ひ人の絵
ちくふよ巡し法天日坊が首途の血ぬり八口と田村ぐ捕
よれ首ゆよ〜と〜〜と抜藏目出〜〜と悦び勇ま〜
金の文交狂も狂ふの合ふ〜〜

吾嬬下ふ十三駅巻之五大尾

市川圓蔵
山下金作
市川團次
豊原藏
天日坊
尾上菊五郎藏